

2026年 京都キリスト召団聖日集会 講筵要旨見出し

2026年1月18日 「聖意現成、聖意体現」を祈願して、主キリストの真の証言者、体現者とされるよう祈り求める！（今年の目標）

2026年2月1日 「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。（中略）
汝らの為に処を備へば、汝らを我が許に迎えん！
我が居る処に汝らも居らん為なり。」

2026年2月8日 神・キリスト讃美の人生を生きる

2026年2月15日 主キリスト（聖霊の主）と「共に在る処」が天国

2026年3月1日 「天地一如」の霊的現実を生きる（ヨハネ伝1章、3章）

——奥田幸子姉召天14周年記念——

2026年5月10日 聖句を抜き書きすることの奨め

2026年6月7日 いと小さき者を顧み活かし給う「み霊の主キリスト」

2026年6月14日 「キリスト道」の原点に立ち帰る



2026年 京都キリスト召団聖日集会 講筵要旨

○2026年1月18日(日)

「聖意現成、聖意体现」を祈願して、主キリストの真の証言者、体现者とされるよう祈り求める！(今年の目標)

【講筵要旨】

どこまでも「主キリスト(みたまの主)」が主役であって、各自はその導きに全托して歩むのみ！

主キリストは、その「みことば」(霊言)を以って導き給う。

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」(ヨハネ伝6章63節)

とある通りである。この事態が成就・実現しているためには、

「我、主と偕に十字架につけられたり、最早、肉なる『旧き我』生くるに非ず、『新生』を賜わりし『新しき我』、みたまの主に在りて生くるなり。」(ガラテヤ書2章20節)

との自覚が必要である。「聖意体现者」(証し人)であるためには、「聖意」がその人において「現成」していなければならない。これには、主の恵み(救いの事態)を100%信受・体受していることが必要。私たちの「祈り」は、まず、そこに向けられていることが必要、大切。

【今日の聖句】

「凡て労する者、重荷を負う者、我(キリスト)に來たれ、我、汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我に倣いて我が軛を負え！さらば靈魂に休息を得ん！」(マタイ伝11章28節～30節)

「先ず神の国と神の義とを求めよ、そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられん！」(マタイ伝6章33節)

「活かすものは『霊』であって、『肉』は役立たない、私(イエス)が語った言葉は、『霊』であり『生命』である。」(ヨハネ伝6章63節)

○2026年2月1日(日)

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。(中略)汝らの為に処を備へば、汝らを我が許に迎えん！我が居る処に汝らも居らん為なり。」(ヨハネ伝14章1～4節、抜粋)

【講筵要旨】

主イエスは弟子達との別れに際して、



「われ平安を汝らに遺す。我が平安を汝らに与う。」

と約束してくださった。そして、別れに際しての最後の言葉が

「此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。汝ら世に在りては患難あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり。」

と勝利宣言してくださっている。私（奥田）にとって、どんな状況の下でも、みたまの主キリストが居てくださるが故に、「平安」な心で居ることができること、これに勝る宝は無い！

【今日の聖句】

「なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。また祈るとき、異邦人の如くいたづらに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思うなり。さらば彼らにならうな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要なる物を知り給う。この故に汝らは斯く祈れ。……（「主の祈り」につづく）」（マタイ伝6章6～9節）

「さらば何を食い、何を飲み、何を着んとして思い煩うな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。この故に明日のことを思い煩うな。明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。」（マタイ伝6章31～34節）

○2026年2月8日（日）

神・キリスト讃美の人生を生きる

【講筵要旨】

「人生の目的は神讃美に在り」

と小池先生は語られた。主キリストはピリポに対して

「私を見た者は父（神）を見たのだ」

（私において父なる神（の愛）が100パーセント顕現しているのだ）

と語っておられる（ヨハネ伝14章）。

「証人」とは、他人が見ていない事象を「見た者」として明らかにする役割を担う者のことを言う。イエス・キリストは、正に、「神」の証し人。しかもその内容は、人には見えない「愛」の実証者であった（「私を見た者は、父なる神を見たのだ」と）。

私たちキリスト信徒は、それぞれの人生とその存在において、神・キリスト（その愛）を証しする役目を賜っている。それはガラテヤ書2章20節の使徒パウロの告白が示してくれている。



【今日の聖句】（ヨハネ伝6章1節～40節までの抜粋）

「神の業はその遣わし給える者を信ずる是なり。」（ヨハネ伝6章29節）

「イエス言い給う」「まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、されど我が父は天よりの真のパンを与えたもう。神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり。」彼等言う「主よ、そのパンを常に与えよ」イエス言い給う「われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。」（ヨハネ伝6章32節～35節）

「それわが天より降りしは、我が意をなさん為にあらず、我を遣わし給いし者の御意をなさん為なり。我を遣わし給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終わりの日に甦らす是なり。我が父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終わりの日にこれを甦らすべし。」（ヨハネ伝6章38節～40節）

○2026年2月15日（日）

主キリスト（聖霊の主）と「共に在る処」が天国

【今日の聖句】 注目する御言葉——ヨハネ伝14章1～3節

「処を備えに往く。往きて用意が整えば、また来りて汝らを迎えん。

わが居る処に汝らをも居らしめん為なり。」

【講筈要旨】

（1）主キリストは、「天」と「地」を結ぶ「架け橋」となってくださった。主キリストは、「天」界（根源界）に居られたが、「地」界に降臨してくださった。そして、「天界」と「地界」（現象界、この世）とを結ぶ「架け橋」となってくださった（ヨハネ伝1章7～18節）。

「我は道なり、真理なり、生命なり、誰にても我に由らでは神の国（天界）に入ることも能わず。」

主キリストの賜う「みたま（聖霊）」が、「天界への道」の同伴者である。御自身が「天界」（命の世界）での「実在者」であるだけでなく、我々、地界の住人を天界へ導き入れる「道」となってくださった。天界（真の命の保有者のみが存在することの出来る世界）に入るにふさわしい存在者とは、「罪」なき人、「罪・即ち自我」無き人、真の生命の保有者であって、イエス・キリストのみがそれに該当する。別の言葉で言えば、「無私者、無我者」（自己主張をしない人）のことである。

「主の祈り」（マタイ伝6章9節～13節）がそれを示している。また、

「まず、神の国と神の義とを求めよ」

とのメッセージがそれを示している。



(2)

「恵福^{さいわい}なる哉、霊の貧しき者、天国はその人のものなり。」

「霊が貧しい」とは、「自己主張、自我を立てる在り方」をしないこと（別の言葉で言えば、「神を一切とする在り方」のこと）である。

主イエスは、「霊の貧者」（自己主張、自我主張をしない人、無「我」者）であつた。すると、そのイエスを、父神の霊が満たした。

「恵福なる哉、霊の貧しき者、天国はその人の有^もなり。」

とはイエスご自身の「自己告白」であつた。「0＝∞」（ゼロ イコール 無限大）。

天国体であつたイエスは、その内実を我らに与えんとして、十字架に架かり、「我らの自我、自己主張、根源的な罪」を取り除いてくださった。そこに聖霊・御霊が内住し給う。これがガラテヤ書2章20節のパウロの告白であつた。

○2026年3月1日（日）

「天地一如」の霊的現実を生きる（ヨハネ伝1章、3章）

——奥田幸子姉召天14周年記念——

【講筵要旨】

京都キリスト召団がスタートしたのは、1972年の元旦、奥田が40歳になる年のことで、それまで所属していた集会から離れて、独立伝道への道を踏み出したことに遡ります。それを支えてくれたのが幸子姉でした。つまり、元始メンバーは、奥田（私）と妻・幸子の二人から始まったわけです。京都大学法学部で教授職に従事しながら、独立伝道を志すということは、容易なことではありません。それを全面的に支え、協力を惜しまなかったのが、幸子姉でした。だから、京都キリスト召団は、奥田と幸子姉との二人で築き上げ、発展させて来たと申し上げることができます。これは本当に有難いことでした。

幸子姉は、現在、孫の石田翔君、衡平君と共に天界において主キリストの御傍で、輝く日々を送りつつ、地上の私達のために執り成しの祈りを捧げてくださっていると思っております。そして私もまた遠からず、天界へと旅立つことになりましたが、幸子、翔、衡平の三人の存在は、私の思いをいつも天界（天国）へと引き上げてくださっています。

まさに、「天地一如」と言うことができます。

【参考聖句】（ヨハネ伝1章及び3章から）

「されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権を与え給えり。かかる人は血脈^{ちすじ}によらず、肉の欲^{ねがい}によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。」（ヨハネ伝1章12節、13節）

「律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストにより



て来れるなり。いまだ神を見し者なし、ただ父の懐ふところにいます独子の神（キリスト）のみ之を顕し給えり。」（ヨハネ伝1章17節、18節）

「人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず（ヨハネ伝3章3節）

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。神その子を世に遣したまえるは、世を審さばかん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。（ヨハネ伝3章16節～18節）

○2026年3月15日（日）

信仰（福音）の原点に還る！

【講筵要旨】

我らの信仰（福音）の原点は、ヨハネ伝福音書14章～16章、マタイ伝福音書5章～6章、ロマ書8章に記されている。

日常生活の「生」の現実は、「外なる人は破るれど」とあるように「破れつばなし」であるが、キリスト（みたまの主）より賜わる「内なる人の現実」は、「日毎に新た」（新生）なる事態である。コリント後書4章16節～18節にある通り、

「我らが受くる暫くの軽き患難は、極めて大いなる永遠の重き光栄を得しむる。」

のである。

主キリストは「訣別遺訓」（ヨハネ伝14章～16章）の最後のところで、

「なんじら世にありては患難なやみあり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり。」

と勝利宣言して、激励してくださっている。使徒パウロもコリント前書13章において、「愛の讃歌」を奏でてくれている。使徒ヨハネは、その「第一の書」において（特に第3章）。使徒パウロの「神の愛の勝利宣言」は、ロマ書8章が高らかにうたい挙げている。

高齢化社会に生きる私たちにとって、晩年は、決して生やさしいものではなく、厳しい現実と直面する。それだけに一層、互いに「祈り」をもって助け合い、励まし合い、御霊の賜う「信・望・愛」（コリント前書13章）を信受・体受して「キリスト讃美・神讃美」の日々を送りたいものと念願する。

【参考聖句】

「然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。己の御子を惜しまずして我ら衆すべてのために付し給わたいし者は、などか之に添えて万物を我らに賜わざらんや。」（ロマ書8章31節、32節）



「われ確^{かた}く信ず、死も生命も、御使いも、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ書8章38節、39節）

「此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。なんじら世にありては患難^{なやみ}あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。」（ヨハネ伝16章33節）

○2026年5月10日（日）

聖句を抜き書きすることの奨め

【講筵の要点】

（1）私達の生存（過去・現在・未来）を支えてくださっているのは、主キリストにおいて御自身を顕してくださいました「父なる神」である。

大切なことは、

「私達がどう思うか？」

ではなく、

「主キリストは、どう思ってくださいっているか？」

である。それは、福音書における主イエスの聖言において顕現している。それをしっかりと受けとること。例えば、

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、我が汝らに語りし言葉は霊なり生命なり。」（ヨハネ伝6誌63節）

「人が生きるのはパンのみによるに非ず、神の口から出る一つ一つの言葉による。」（マタイ伝4章4節）

「我は道なり、真理^{まこと}なり、生命なり、我によらでは誰にても父（神）の御許に到ること能わず。」（ヨハネ伝14章6節）

など。

それらの「御言」をノートに書き留めていくこと（日付け付きで）、そのような「聖言葉集」を作成すること、これをお奨めしたい。

このことによつて「信仰」とは、「自分がどう思うか？」ではなく、

「神・キリストは、どのように思ってくださいっているか？」

が大切であることに気付かされる。

（2）聖書（とくに新約聖書）を「読むこと」は、

「神・キリストと対話すること」



だと言つてよい。「自分がどう思うか」ではなく、

「神・キリストは、どのように思つてくださっているか」

が決定的に大切なこと。「自分（自分の信仰）」を拠り所とするのではなく、

「神・キリスト（その御言葉）を拠り所とすること、そして、それに全托して歩むこと」

「み言葉・み霊・祈り」がワンセット（一体）となつて自己の日々を支えてくださっていることがよく分かる。

その点で詩篇の「祈り」は、私達の祈りの助けとなる。詩篇は、「祈りの友」だと言つてよい。例として、

「汝の聖言は、わが足の灯火、我が路の光なり。」（詩篇119篇105節）

「我がうちに思い煩いの満つるとき、汝の慰めわがたましひを喜ばせ給う。」（詩篇94篇19節）

など。（他に、詩篇37篇、94篇17、18節、91篇、62篇、63篇）

○2026年6月7日（日）

いと小さき者を顧み活かし給う「み霊の主キリスト」

【聖句】

ヨハネ伝福音書3章16節～21節

ヨハネ第1書（ヨハネの第1の手紙）

【講筵要旨】

「信仰」とは、御言葉を全存在で（全身全霊で）信受・体受すること、それに全托して歩むこと。

「初めに御業ありき、初めに神・キリストの愛ありき」
みわざ

この聖なる事態を、全存在で、全身全霊で信受・体受し、それに全托して生きること。そこから、コリント前書13章、ヨハネ第1書へと展開する。

○2026年6月14日（日）

「キリスト道」の原点に立ち帰る

【聖句】

ヨハネ伝14章～15章、マタイ伝5章～6章

【講筵要点】

「主の祈り」（マタイ伝6章9節～13節）の現実化！



召団の使命、各人の使命は、「天」において御心（聖意）が成っているように、「地」においても御心（聖意）を成らしめ給え！と祈ること。

「この我（召団・各人）を通して！」

と。そのためには、まず「各人において」そして同時に「召団において」聖心（聖意）が成っていることが不可欠である。

即ち、

「聖意現成」↓「聖意体現」

へと展開する。それには「祈り」が不可欠である。「みたま（御霊）の主キリスト」が「我」（各人および召団）に働きかけて聖意（御旨）を成就し給うように祈ること。どこまでも「神・キリスト」主体の事態（「我」は「無者」）である。「肉」なる「我」は、十字架に付けられて「無者」とされている。

「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。」（ガラテヤ

書2章20節）

【参考聖句】

「天にいます我らの父よ、願わくは御名の崇められん事を。御国の来らんことを。御意の天のごとく地にも行われん事を。我らの日用の糧を今日も与え給え。我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。我らを試みに遇わず、悪より救い出したまえ。」（マタイ伝6章9節～13節）

